

<PGI 学術講演抄録> ※無断転載を禁じます

『歯根破折の原因と予防-補綴の立場から-』

東京医科歯科大学歯学部 小林賢一

歯根破折は種々の原因により生じます。しかし、歯根破折を生じた歯は、通常抜歯となります。欧米では予知性の高い無髄歯の修復治療には、biologic width+フェルール(2mm)および築造窩洞形成後に象牙質の厚さが1mm必要といわれています。

しかし日本では、残根といえども抜歯に対する患者の同意を得ることは難しい。そのため、条件の悪い残根状態の歯も治療の対象とせざるを得ません。さらに、天然歯はインプラントとは異なり、経年的に移動します。この歯の移動により、咬合関係が変化し、結果として咬合力の不均等を生じ、歯根破折のリスクが高くなります。

今回、歯根破折の原因、さらに予防としてメンテナンスとしての咬合調整について補綴的立場から解説します。

追伸、

今年の5月に米国歯科補綴学用語集(第9版)が改訂されています。Centric relationは、第5版と同様、定義は一つになり、この用語が廃れていくという表現もなくなっています。

Centric relation (CR): “歯の接触に依存しない上下顎の関係であり、この位置で下顎頭は関節隆起の後部斜面に対して前上方に位置し、関節をなす。この位置では下顎は純粋な回転運動に限定される。この緊張がなく、生理的な上下顎の関係から、患者は上下、左右、前方への運動を行うことが可能である。この位置は、臨床的に有用であり、再現性のある基準位である。” 特に、centric occlusionは、第5版より、“下顎が中心位にあるときの上下顎の歯の咬合。この咬合位は、最大咬頭嵌合位と一致することも、しないこともある。”と変更されており、第9版では、centric relationと同様、この用語が廃れていくという表現もなくなっています。これにより、Posselt figureのCOは、MI(Maximal intercuspal position)に変更することになりそうです。

今回は、GPTの改訂を受けて、『中心位定義およびその変遷』についても、講演の最初に解説します。